

## ミュージックフェラインの ステージで

ウィーンのみならず、国立音楽大学とは、切っても切れない縁がある。

「ミュージックフェライン」というと、一般にはウィーンフィルのニューイヤークンサートも催される金色の大ホールのある建物を指すが、これは「ウィーン楽友協会」の本拠地である。

ウィーン楽友協会が設立されたのは1812年。ベートーヴェンやシューベルトもまた生きていた頃の話である。

協会発足には楽界のそうそうたるメンバーが携わったにもかかわらず

らず、会の趣旨はあくまでも「愛好家（アマチュア）の集まり」というものだった。それに違わず協会主催の演奏会は1848年までの長い間「愛好家のサークル活動」という形が保たれていた。

現在の建物が完成したのは1870年のことである。設計者はテオフィル・ハンゼンだが、彼の設計による大ホールの音響は、その後100年以上たった今日でも世界で右に出るものがないと言われている。

ブルックナー、ブラームス、マーラー、シューベルトなどの作曲家は、このホールの響きを熟知していた。ということは、これらの作曲家の作品はミュージックフェライン大ホールで演奏されてこそ、その理想の音響が得られるのかもしれない。

楽友協会の一部として音楽学校も設立された。最初にてきたのは

歌のクラスで、その後ヴァイオリンのクラスも作られた。これが現在のウィーン国立音楽大学の前身である。

現在のように大学の建物が別個に確保されたのはかなり最近になってからであり、それまでは授業など協会の建物の中で行われた。ブルックナーも教鞭を執っていた事があり、彼のもとでフォーゴ・ヴォルフやグスタフ・マーラーなども勉強していた。

音大はその後の歴史の中で拡張に拡張を重ね、今日では作曲・指揮、鍵盤楽器、弦楽器、管・打楽器、教育、教会音楽、歌・オペラ、演劇・演出、映画・テレビの九つの学部と、それに付随する15のゼミナー、ならびに12の研究所が開設されている。

校舎はウィーン市内17カ所もの建物に分散されているが、3千人あまりもの学生が学び、そのうち



現代曲のアンサンブル



ムジークフェラインでのウィーン音大マラソンコンサート(バイフオルガンと8本のトランペット)



夕方5時から夜10時近くまで演奏が続く

約3分の1は、世界各国(年によって変動があるが、おおよそ50から60の国々)から留学している外国人留学生である。

国立の学校だけに学費は安い。専攻課程を勉強するのに、外国人(日本人)が納めなければならぬのは、半年間(一学期)約5万円ほどでしかない。

東京にアパートを借りて高額の入学金や学費を私学に払う事を考えたら、いっそはじめからウィーンに留学してしまった方が経済的には安くつく、というのはまぎれもない事実となった。

一時代前には日本で大学を卒業し、そのあと数年研鑽(けんさん)を積み、外国へ留学する、というのが通常のパターンで、たとえ外国の大学を卒業しなくても、その「留学歴」がキャリアの一部として重視された。

最近では猫も杓子も外国志向となり、まがりなりにもプロの音楽

家を目指すには海外留学しない方がめずらしいぐらいになった。これを反映してウィーン音大の入試を受ける日本人受験生の平均年齢も、年とともに若くなる傾向が見受けられる。また入学したら、一応卒業試験を射程距離におく学生が大多数だろう。

だが海外留(遊?)学生の数こそ増えても、それが直接日本人の音楽レベルの上昇には「まだ」つながらないようだ。彼女ら(日本人留学生のほとんどは女性である)が学校で、あるいは町の先生として日本の津々浦々で後輩を育て、その子らが大人になった時が楽しみである。

毎年1回ムジークフェラインとウィーン音大の連携を象徴するようなコンサートが催される。

ここには有名な大ホールと、ブライムスザールという名前の小ホール以外にも、カンマーザール、ワーグナーザールという計四つの

会場がある。

1990年にはその全部のホールを使って夕方5時から夜10時近くまでマラソン・コンサートが行なわれた。内容は「なるべく変わった趣向のものを」というので学生達が知恵を絞り、普通には聞けない、見られないものを中心に、30分を1クールとしたプログラムが組まれた。

チェロだけのオーケストラ、ロンポーン12本のアンサンブル、パイプオルガンと8本のトランペット、ピアノ2台8手の連弾、15台のコントラバスのアンサンブル、本格派ビッグバンド、即興ミュージカル、ハンマーフルイグエ(18世紀のピアノ)、電子音楽その他、盛りだくさんの内容だった。普段はぞろりとした服装でいざムジークフェラインのステージに上がると見違えるようだ。馬子にも衣装、とはこの事か。